

恐怖は ゆるやかに

渡辺淳一

角川書店

渡辺淳一

恐怖は ゆるや

角川書店

昭和四十六年七月二十日 印刷発行

恐怖はゆるやかに

著者 渡 辺 淳 一

発行者 角 川 源 義

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三

電話 大代表 東京 二六五一
七一一一

〒 一〇二

振替 東京 一九五二〇八

本文整版 印刷 信教印刷

製本 宮田製本

定価 六五〇円

目次

恐怖はゆるやかに

3

閥の壁

77

北方領海

135

恐怖はゆるやかに

I

事件は日曜日の午後一時におきた。

それは数秒にも満たないほんの一瞬の出来事であった。だがそれで三十一歳の小倉俊介の生活は大変な狂いを生じてしまった。その数秒の瞬間から彼の言葉に従うと、坂を転るように悪い方へ走り始めたのである。

小倉俊介は中学の数学の教師で、妻の説子は小学校の教師である。四年前に二人は結婚したがまだ子供はつくっていない。子供よりも共稼ぎでまず車を買うことが二人の望みだった。こつこつと積みあげて二年前に三十万円の頭金で小型乗用車を買った。その半年前に二人は続いて運転免許を取っていた。彼等の住んでいる団地から勤め先の学校まで二人は同じ車で一緒に出かけ、まず近い方の俊介の学校に寄り、それから説子一人で小学校まで運転していくのが習慣だった。帰りはちょうどこの逆のコースをたどる。俊介が三十歳になるまでに車を買ひ、三十五歳までに子供を男、女一人ずつつくり、四十歳までに自分たちの家を持つのが彼等の望

みだった。その生活設計は第一の段階までは順調に進み、いよいよ第二段階に進むところだった。

その日昼少し過ぎに、俊介は三人の女学生を乗せて札幌市の郊外にある公園のアパートを出た。三人は皆、俊介の教え子でこの春中学を卒業し高校へ進んだ少女だった。二時間ほど俊介の妻を交じえて賑やかなおしゃべりをしたあと少女たちは帰ることになった。外は北国の四月には珍しい温かい日だった。

「よし先生が送ってやろうか」

陽気に誘われたように俊介は立ち上がった。二人を街で降ろし、残った一人を山の手の家へ送り届けるため俊介の車は大通りを西へ向かった。運転しながら俊介はふと十六歳の少女と並んで乗っていることに妙な照れを覚えた。

彼等の前を三年前の年式の軽四輪車が走っていた。その車にも運転席と助手席に二人が並んで坐っていた。道は街の中心部から郊外へ向かうネックに入り車が混みはじめていた。小倉たちの車と前を行く軽四輪の車間距離は五メートルと離れていない。軽四輪の後を俊介の車は四十キロで進んでいた。車が信号の半町前まできた時、歩行者専用の青信号が小刻みに点滅を始めた。それを見てまわりの車は一層スピードをあげた。

「間に合うな」

俊介がそう思った瞬間、直前を行く軽四輪のブレーキランプが赤く光った。急ブレーキの音と少女が小さく叫んだのはほとんど同時だった。軽四輪の後部が巨象のように彼の目の前に迫

り、駄目だと思った次の瞬間、俊介は全身に鈍い衝撃を感じた。

たちまち前後の車が止まり、弥次馬が寄って来た。前の軽四輪の運転席のドアが開き、手のつけ根にあてた若者が降りてくるのが見えた。薄い茶の色眼鏡をかけた小柄な男で、ドアから出たところで一旦立ち止まり俊介を見定めたうえで、ゆっくりと近づいてきた。

「大変なことをしてかしてしまった」俊介は両手でハンドルを抱え込んだまま男が近付いてくるのを待っていた。

若い男は両方の車の壊れた個所を見届けてから俊介のいる窓側に来て言った。「これなら動けますよ、とにかく道路の端に寄りましょうや」思いがけず男の声は女性のようにやさしかった。それで俊介の緊張は急に解け少女が彼の左肩にしがみついていたのを知った。俊介は少女の手を戻すと軽四輪車に続いて十メートル先のガソリンスタンドの端に車を乗りあげた。国道は再びもとどおりの車の流れに戻り、一時、車を降りて見にきていた弥次馬も引きとり、周りにはスタンドの従業員と二、三人の歩行者だけになった。

「名刺を戴けませんか、僕はこういうものです」

若い男が突っ立ったままの俊介に言った。男の名刺はホステスがよく使う小さな判で横書きに、バー・「シャトウ」・チーフバーテン、桑田隆好、と書かれている。

俊介は背広の胸ポケットから名刺をとり出すと男に渡した。

「ああ、学校の先生ですか」

男は俊介を改めて見詰め、それから女学生が乗っている俊介の車の運転席を見やった。男は

茶の背広の襟元に黄色いマフラーを巻きつけ、左の薬指に白く大きな指環をはめていた。

「これはあんたの車ですね」

「そうです」

うなずくと男は俊介の名刺の裏に車のナンバーを書き込んだ。

「お袋を乗せて親戚の処へ行くところだったんですよ」

言いながら桑田という男はつぶれてメッキのはげたバンパアに片足をのせた。男の車の助手席にうずくまったように見える人影はこの男の母親なのかと俊介は後部窓^{リアウィンドウ}ごしにその後姿を追った。

「車の修理はもちろんおたくの方でしてくれるでしょうね」

桑田が下から俊介を覗き込むようにして言った。

「あんたの方からぶつかってきたわけですから」

「しかし、あんたが窓然急ブレーキをかけたからこんなことになったのですよ」

「そりゃそうだけど、あんたが適当な車間距離を保たず僕の車に接近しすぎていたんですよ。前の車が急ブレーキをかけても止まれるだけの車間距離を保つということはちゃんと道路交通法で定められているわけですから」

「ただど街の中で充分な車間距離をとっていたら、その間にたちまち別の車が入りこんでくるじゃありませんか」

「そう言っても通らないですよ、あんたが何と言おうと法律はちゃんとそうなっているの

ですよ」

問題にならないと言うように桑田は軽く笑った。

「しかし、あんなところで急停止されたら止まれるわけではないでしょう」

俊介は次第に怒りが込みあげてきた。

「一体あんなところで何故、急ブレーキをかけたんです」

「婆さんが財布を落としたからですよ」

「財布を？ どこにですか」

「車の床ですよ」

「そんなことでいちいち急ブレーキをかけられちゃ敵いませんよ」

「小倉さんは御存じないらしいけど、とにかく追突した方が悪いんですよ、なんなら警察に行ってみましょうか」

「あんな警察になんか行かない方がいいよ」

二人のやりとりを聞いていたガソリンスタンドの男が口を出した。

「この人の言う通り後ろからぶつかってきた方が悪いんですよ。警察に行ってもあなたが悪いということになって弁償させられたうえに罰金を取られるだけだから、この場で示談にした方が得ですよ」

二人の男に挟まれたまま俊介は黙った。

「こちらが三万くらいに、あんなの方が一、二万、せいぜい五万くらいですよ」

「五万……」

五万といえど彼の一か月の給料より多い。一瞬の不運で五万も払う気には俊介はとてなれない。

「あんたの車は保険に入っていないのですか」

桑田が尋ねた。

「強制保険だけです」

「そうですか、対物保険にも入っていないんですか」

桑田は指環の光る左手を顎にあてた。強制保険は車を買うと同時に自動的に入れられる必要にして最低の保険である。それによれば人身事故の場合、負傷では三十万までの医療費、死亡した場合は三百万までがおりにくくなっている。だが実際にはこれだけでは少ないので、ほとんどのオーナードライバーは人身と車の物損に対してさらに追加した保険に入っている。いづどんな事故を引き起こすかわからないのだから保険は多く入っているにこしたことはない。がそれはそれなりに年、二万、三万という掛金が要る。小倉夫妻のような慎重派には相手に被害を与える事故などはまず考えられないのだから、これまで強制保険だけにしか加入していなかったのも無理はなかった。

「とにかく罰金をとられるだけ損ですよ」

ガソリンスタンドの男がもう一度言った。

どうみても俊介に勝ち目はないようである。

「小倉さんはどこか整備工場を知っていますか」

「いや、別に」彼は諦めた。

「じゃ僕の知っている処にいれさせて貰いますよ、Mモーターというのです。僕はよく世話になって知っているとこだからよそよりは安くしてくれるはずですよ。あなたの車もよかったらそこにいれませんか、二台一緒ならなお安くしてくれるかもしれませんよ」

このままでは恰好が悪いうえに夜は片方のライトしか点かず走れない。仕方なく俊介はうなずいた。

「今日は日曜日だけど、とにかく電話をしてみましょう」スタンドの赤電話に行きかけて桑田は思い出したように立ち止まった。

「ところで、あなた方は体の方は大丈夫ですか」

俊介は右の胸のあたりに手を当てた。急停止で前のめりになった瞬間、ハンドルの枠が右胸に当たったらしく大きく息をするとかすかに疼く。だが病院に行くほどでもないようである。隣の少女も特別痛そうなことは言っていない。

「僕はどうも後ろから首を振られたらしくてこのあたりがちょっと痛いんですよ」
桑田は両手を首の周りに当てた。

「鞭打ちですか？」

「そうらしいんですがね、まあ僕は大了なことはないと思うんですが、ちょっと婆さんが痛がってるので心配なんですよ」

桑田は自分の車を振り返った。

「病院に連れてった方がいいですよ、鞭打ち症はあとになって症状が出るのがあるといいますからね、初め放つという後で悪くなるとかえって面倒になりますよ」

ガソリンスタンドの男が俊介と桑田と半ばずつ見ながら言った。

「僕も心配なんですよ、なにせ年寄りですからね、でも医者に診て貰うとなると警察の事故証明が要るわけでしょう」

俊介は蒼ざめた顔で二人の話を聞いていた。

「自動車保険を使うとなるとそうなりますよ」

スタンドの男が言ったが俊介にはそのあたりの知識は全くなかった。すべてが彼には初めての経験だった。

「どうしますか、やはり警察に届けて事故証明を貰いましょうか」

桑田が俊介に言った。両方の車の修理代を負担したうえ、老婆とこの男の医療費まで自分が持つことになるのかと俊介は泣き出したくなった。

「僕一人で病院代まで払うのではありませんよ」

「それじゃ保険にしますか」

桑田は簡単に言っただけだ。

「でも大したことがなければあんたが負担した方がいいですよ、やはり警察にいけば罰金をとられたうえ、鞭打ち症としたら免許停止の行政処分がくるし、おまけに新聞にまで出るか

もしれませんからね」

「新聞！」俊介は声をあげた。

「そうですね、人身事故ですからね」

彼は自分の名が学校名とともに新聞に出ることを想像してみた。酔っぱらい運転でも、スピード違反でもないが——中学教師追突して老婆を鞭打ち症に、教え子の女子高校生と一緒に——といった活字を想像するだけで身が縮まった。そんなことになったら校長の訓戒処分を受けるかもしれないし、第一、生徒たちの噂にのぼる。実直な青年教師として順調に過ごしてきたのが一度に傷ついてしまう。どんなことがあっても警察になどは行けない。彼は腹からふり絞るような声で言った。

「新聞は困ります」

「それじゃあなたが負担してくれますね」

俊介は力なくうなずいた。

「そうですね、一応レントゲンを撮ってみて貰ったけば安心ですよ。その方が一時的に損でも結局、得ですよ」スタンドの男が我が意を得たように賛成する。

「今日は日曜日だけど救急病院はどこでしょうかね」

「市立病院と中央病院だけれど、ここからは中央病院の方が近いですよ」

「それじゃ小倉さんの車で送って貰いましょうか、僕のは小さくて揺れるので」

俊介は桑田の言うままにうなずいただけだった。

中央病院は内科、外科、整形外科、産婦人科を揃えて三百床近くあり札幌市では比較的大きな法人組織の病院だった。その日の当直医は運よく鞭打ち症には専門の整形外科医の田上医師だった。

桑田と老婆は前後、側面、左右、斜めと合計四枚の頸椎の写真を撮った。桑田は左側頸部の一点を圧されると軽く痛みを訴えるだけだったが、老婆の方は首の運動、とくに後ろに反らされた時には首から上腕にかけて引きつけるような痛みを訴えた。おまけにじっとしていても後頭部に痛みがあり、立ち上がると軽い眩暈を覚えるらしかった。

「息子さんの方は一週間くらいあまり無理な運動をしなければ薬だけで落ち着きますよ。お母さんの方ははっきりした鞭打ち症です。年齢もとっているしこのまま放っておくと手足に痺れがくるといけないので入院した方がいいでしょう」四十歳前後の上背のある田上医師は一言ずつ説得するように言った。

「レントゲンで骨に異常はないのですか」

桑田が尋ねた。

「骨は大丈夫です。鞭打ち症というのは頸が宙で鞭のように撓ることから名付けられた病名です。首や頭が直接どこかにぶつかるというわけではないから骨がやられるということはまず